

一国政府と世界市場

投機マネーの実態

クレジット

『マネー革命』,
「2.世界は利息に飢えている」
(NHK)より

注目点

- ➡ 中途半端はいけません。
- ➡ 一国政府は世界市場には勝てません。
- ➡ 部分最適は全体最適にはなりません。

中間的相場制

1. 固定相場制
2. **中間的相場制**
 - A) **為替バンド制**
 - = あらかじめ表明しておいた変動枠内に相場を固定する
 - **ERM**
 - B) クローリング・ペッグ制
 - = あらかじめ表明しておいた一定の変化率で相場を政策的に変動させる
 - C) クローリング・バンド制
 - = 為替バンドとクローリング・ペッグとの混合
3. 変動相場制

為替バンド制

- 通貨当局はあらかじめ表明しておく。
自国通貨の価値が——
 - バンド以上に上がったなら売るぜ！
 - バンド以下に下がったら買うぜ！
- 実際のところ、投機筋は自国通貨の価値が、
 - バンドの限界すれすれまで上がったなら、通貨当局の先手を打って売るはずだ。
 - バンドの限界すれすれまで下がったら、通貨当局の先手を打って買うはずだ。

為替バンド制(結論)

- 通貨当局は手を汚さずに投機筋を利用して相場を安定させることができるはずだ。
- 通貨当局への投機筋の信認が前提
- “はずだ”が崩れたら危機
↓そして
準備金がなくなったら崩壊

ERM

- 1998年まで欧州通貨制度(EMS)で採用されていた為替バンド制

仮定

- イングランド銀行は手持ちの外貨準備を円建てで100億円用意している。
- 現在:(為替バンド制=部分的固定相場)
 - 1ポンド100円
- 将来or予想(変動相場):
 - 1ポンド50円

1. 一番単純なケース

- 投機筋を一つの共同意志体だと仮定しよう。

昨日...

- 固定相場制=1ポンド100円
- 投機筋
 - 投機資金として1億ポンドを仕入れておく。
- イングランド銀行
 - 外貨準備として100億円を仕入れておく。
 - そのために1億ポンドを支出した。

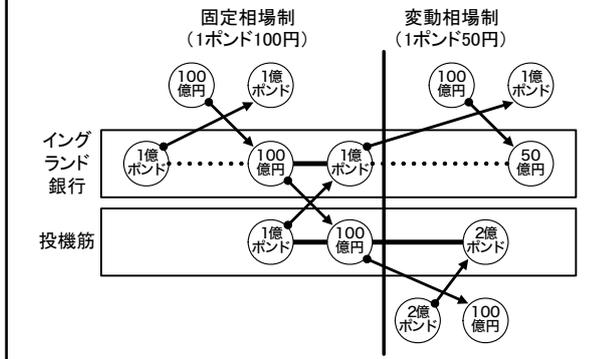
今日...

- 固定相場制維持=1ポンド100円
 - 投機筋
 - 1億ポンドを売って100億円を買う。
 - イングランド銀行
 - 為替バンド制を維持するために、無条件で、固定相場の1ポンド100円でポンドを買う。
 - 手持ちの100億円を売って1億ポンドを買う。
- ↓
もうポンドを買うための円は残っていません。

明日...

- 固定相場制崩壊=1ポンド50円
- 投機筋
 - 100億円を売って2億ポンドを買う。
 - ポンド建てで1億ポンドの儲け
 - 現在と将来との間で今日の1億ポンドを売って明日の2億ポンドを買ったことになる。
- イングランド銀行
 - 手持ちの1億ポンドの資産はいまや円建てで半分の価値しかない。円建てで50億円の損失。
 - 空っぽになった100億円の外貨準備を再び積み立てるために、これから2億ポンドを支出(つまり1億ポンドを追加)しなければならない。

図解すると...



2. 通貨攻撃の実態

- 自己実現的投機
 - 明日の予想を今日実現する。

追加的仮定

- 2つの投機会社が
 1. それぞれ6,000万ポンドの投機資金をもっている。
 2. それぞれ投機には1,000万ポンドの手数料が必要になる。
 - ディーラーに支払う為替取引手数料
 - 情報仲介者に支払う費用
 - 回線代
 - 人件費

片方攻撃

- イングランド銀行の準備金は100億円 (=1億ポンド分)
- 投機会社1社の投機資金は6,000万ポンド
- したがって、1社で売りを仕掛けても為替バンド制は崩壊しない。
- すると、投機会社は手数料分の1,000万ポンドの純損失。

投機会社の選択肢

- 投機会社の選択肢は、
 1. 両社とも投機しないか
 - この場合は利潤もゼロだが損失もゼロ
 2. 両社とも投機するか
 - この場合は利潤が生まれる